

## 死の闇の彼方に

主任司祭 吉池 好高

「あなたは塵であり塵に帰って行くのです」  
四旬節のはじめを告げる灰の水曜日、司式司祭は、わたしたちの額に灰を塗って、このように唱えます。

新潟教区に外向していた頃、火葬を終えると直接に墓地に向かい、骨壺を用いずに、お骨をそのまま墓石の下の土に散骨していたことを思い出します。文字通り塵に帰るのが身に沁みる風習です。わたしたちの人生はこのように葬られることよって塵に戻ります。

旧約聖書創世記の二章から三章に語られている、神による人間の創造の物語によると、創造主である神は地の塵から人間を形造り、その中にいのちの息を吹きこまれ、こうして人は生きる者となったと語られています。けれども、このようにして創造された人間は自ら創造主とのいのちの絆を断ち切って、その結果、神の恵みである自分の中に息づいている恵みとして、いのちを放棄して塵に戻るしかなくなってしまうのです。神の御心に背く罪によつて、わたしたち人間はこのような運命に脱してしまつたのです。そこには絶望しかない暗黒の運命が待ち

受けています。

けれども、新約聖書の福音によれば、わたしたち人間をこのような死の暗闇から救うために、わたしたちの世界に来てくださったイエス・キリストは、わたしたち人間が経験する全てを、自ら引き受けてくださった墓に葬られたのです。けれども神の御子イエス・キリストはいのちの源である天地万物の主、イエスがアッバ父よとお呼びしたいのちの源である神とのいのちの絆を失うことなく、父である神の全能の力によつて墓を開いて復活されたのです。

「回心して福音を信じなさい」というもう一つの呼びかけは、このような福音にわたしたちの心を向けるように促しています。

灰の水曜日から始まる四旬節は、わたしたちの救い主イエス・キリストの復活の祭日を目指す日々です。この季節、わたしたちは自分の中にある人間存在の二面性、すなわち、塵に戻るしかない有様と、いのちの源である神を信じる信仰者としての有様を省みるよう呼びかけられています。